日本リスク研究学会誌 7(1)：50－58(1995)

【寄稿論文】

海外旅行傷害保険の加入意思に及ぼすリスク認知の影響*

The Effects of Risk Perception on Insuring against Personal Accidents during Overseas Travel

楠見　孝**，小林　弘典***

Takashi KUSUMI and Hironori KOBAYASHI

Abstract. This study explored the effects of risk perception on insuring against overseas travel accidents. One hundred and twelve undergraduates rated a questionnaire of risk perception of overseas travel accidents(e.g., death, sickness, theft) and the willingness to buy the insurance. Significant differences between repeated and non-repeated or inexperienced overseas travellers were found for risk perception and willingness to pay the insurance. Repeated overseas travelers perceived low risks of travel accidents and were not willing to pay large insurance premiums against them. Non-repeated or inexperienced overseas travellers perceived high risks and were willing to pay large premiums against accidents. The factors of travelers' insuring themselves were the reduction of anxiety and monetary risk based on their high risk perception. The main factor of their unwillingness to insure was the consideration of premium-paying as a waste of money based on their low risk perception. The psychological foundations and ramifications of risk perception and insuring were discussed.

Key words: Insurance, Risk taking, Decision making, Uncertainty, Individual differences

本研究の目的は，大学生の海外旅行に対するリスク認知が海外旅行傷害保険の加入意思に及ぼす影響を，質問紙法によって心理学的に検討することである。

大学生にとって身近な海外旅行は，リスクをともなう活動である。日本人の海外旅行者の増加にともなって，海外における死亡者も増加し，1993年度の死者は384人，その内，犯罪被害による死者は28人である。また，窃盗，強盗等の被害も多く，届け出があった件数は5,269件である(外務省，1994)。とくに，大学生は，はじめて海外旅行に出かけることが多い。その被害・事故防止の上でも，海外旅行のリスク認知と海外旅行傷害保険加入意思を調査することには意義があると考える。

これまでおこなわれてきた損害保険に関する調査は，海外旅行傷害保険の非常に高い加入率を明らかにしている。たとえば，日本損害保険協会（1993）による世帯主2,000人に対する質問紙調査では，最近1年間の海外旅行経験者のいる世帯は23%，そのうち93%の世帯が海外旅行傷害保険に加入していた。これは非常に高い加入率である。その加入方法は，自分で手続きして加入した場合

*　1995年8月1日受付

**　東京工業大学工学部教育群（Tokyo Institute of Technology）

***　三井海上火災（株）（Mitsui Marine and Fire Insurance Co., Ltd.）

（43％）と旅行にセットされていた場合（40％）に二分できた。しかし，加入理由に関する分析はまだ十分とはいえない。そこで，本研究では，海外旅行傷害保険の加入意思に影響を及ぼす心理学的要因に焦点を絞る。

ところで，海外旅行傷害保険は，海外旅行中の不慮の傷害事故による経済的負担を救済する保険である。さらに，旅行中の病気，携帯品の被害，賠償責任についての保障も含むことが多い。これは，普通の傷害保険（日常生活におけるあらゆる傷害事故が対象）に比べると，海外旅行中という時間的場所的に限定された事故に対する保険である。したがって，その保険加入意思は，海外旅行に対するリスク認知が強い影響を及ぼすと考える。

これまで，保険学においては，リスク認知と保険一般（上田　1987），生命保険加入（西村　1989）との関連の分析がある。また，姉崎（1985）は，損害保険商品の第一次品質（契約的属性）だけではなく，第三次品質（心理的品質：ネーミング，商品内容の伝達，付帯サービス）が重要であることを指摘している。そこで，本研究では，旅行傷害保険の加入意思に及ぼす心理学的要因に焦点を当てることによって，リスク認知の影響を明らかにする。

すなわち，リスク認知の解明には，リスク回避志向性の個人差（楠見　1994）やリスク認知の形成要因（海外被害や事故の直接，間接経験，類似事件の記憶など）を，心理学的に検討する必要がある。たとえば，個人差に関しては，楠見（1994）が，リスク回避志向の個人差を，下位尺度「生命リスク回避」「不安」「金銭リスク」によって測定し，リスクのある手術場面等での意思決定に及ぼす効果を説明した。また，リスク認知には，事件報道頻度がリスク認知に影響を及ぼすことが示唆されている（e.g., Combs & Slovic 1979; Lichtenstein, Slovic, Fishhoff, Layman, & Combs 1978）。しかし，こうしたリスク認知やリスク志向行動の個人差に関する心理学的研究が活発になっているにも関わらず，保険加入行動との関連は検討されていない（e.g., Bromiley & Curley 1992，岡本 1992；Trimpop 1994）。

そこで，本研究では，（a）リスク回避志向性の個人差，（b）リスク認知の形成要因（海外経験など）が，（c）リスク認知に及ぼす効果，さらに，（d）海外旅行傷害保険加入意思，（e）保険料の支払い希望金額に及ぼす効果を，大学生に対する質問紙に基づいて心理学的に検討する。

方　法

被調査者　大学生112（男性38，女性74）名。大学の内訳は学習院大学生71名，筑波大学生22名，武蔵野音楽大学生12名，その他７名である。

調査時期　1993年９－10月

手続き　以下の項目からなる質問紙を，教室において集団で実施，または配布回収法で実施した。

(1) リスク回避志向性の個人差の測定

リスク回避志向尺度（楠見，1994）で明らかにした３因子（生命リスク回避，一般的不安，金銭リスク回避）において因子負荷量が高い９項目に加えて，海外旅行リスクに関する６項目（例：もし海外旅行に行くならば，事故・犯罪が少ない地域に行きたい）を加えた15項目（表１）に対して，［1．あてはまらない－5．あてはまる］を５段階評定で求めた。

(2) リスク認知の形成要因

(a) 海外旅行（滞在）経験および旅行時の被害経験：海外旅行回数および，被害経験の回答を求めた。「３ヶ月以上の滞在経験あり；海外旅行経験２回以上；１回；経験がないが行きたい；行きたくない」の５件法で回答を求めた。さらに，海外経験がある人には，被害経験を「被害に遭った；被害に遭いそうになった；被害経験はない」の３件法で回答を求めた。

(b) 自分の周辺の人の海外旅行経験および被害経験：身の回りの人（家族，友人など）で海外旅行経験を話してくれた人数を「５人以上；３～４人；１～２人；なし」の４件法で回答を求めた。さらに，身の回りの人から海外での被害経験「被害に遭った；被害に遭いそうになった；被害経験はない」を３件法で回答を求めた。

(c)日本人被害事件の記憶：5地域の日本人の巻き込まれた事件をあげ，その記憶の有無を4段階（1．全く覚えていない－4．よく覚えている）で評定を求めた。なお，この評定は，質問冊子の最後におこなった。

i)女子大生6人がローマ研修旅行中，乱暴される（1993.2.3）

ii)日本人留学生がサンフランシスコ郊外の高架道下での射殺される（1993.8.21）

iii)老人3兄妹が中国のホテルで殺害される（1993.6.9）

iv)女子大生がメキシコでバス旅行中，射殺される（1993.3.8）

v)日本人夫婦がオーストラリアで行方不明になり，後日，白骨死体で発見される（架空の事件）

(3)リスク認知

(a)地域別のリスク，熟知度，訪問希望の評定：5地域（サンフランシスコ，中国，イタリア，オーストラリア，メキシコ）の治安に関する熟知度（1．全く知らない－4．よく知っている），リスク（1．とても安全だと思う－4．とても危険だと思う），訪問希望（1．絶対行きたくない－4．とても行きたい）を4段階評定を求めた。5地域は(2)-(c)の事件に対応している。

(b)海外旅行リスクの推定：日本人海外旅行者が昨年度（1992）1年間でおよそ1200万人であることを示した上で，昨年度の日本人海外旅行者におけるトラブル（事故，災害，犯罪）による死亡者数，被害金額5万円以上の携帯品盗難被害人数，医師治療を必要とする病人数の推定値を直接求めた。

(c)原因別死亡者数の順位法による判断：昨年1年間における原因別死亡者数を，つぎの6つの原因（海外旅行中の事故，交通事故，薬の副作用，火災，ガン，自然災害（洪水，地震など））に関して，順位法で多少判断を求めた。

(4)保険加入経験（意思）及び保険加入理由

(a)保険加入経験（意思）：海外旅行経験者に対しては；海外旅行傷害保険加入経験（必ず加入；時々加入；加入しなかった）を，未経験者に対しては，加入意思（必ず加入したい；行く場所によって決める；加入しない）をそれぞれ3件法で判断を求めた。

(b)保険加入理由および未加入理由：(a)の加入経験者および加入意思表明者(時々加入も含む)には，加入理由8項目（精神的に安心する，金銭的負担を避ける，海外はリスクが高い，保険料が少額であるなど）に対して，[1．あてはまらない－4．あてはまる]の4段階で評定を求めた。未加入者および未加入意思表明者(時々加入も含む)には，未加入理由10項目（被害は避けることができる，周りの皆が加入していない，リスクが低い，保険料が高額である，掛け捨てはもったいないなど）に対して，[1．あてはまらない－4．あてはまる]の4段階評定で求めた。項目は，日本損害保険協会（1993）の調査項目を参考にして構成した（図1，図2）。

(5)保険料の支払い希望額および加入希望タイプ

(a)海外旅行傷害保険料の支払希望額：10日間のアメリカ旅行に行くとして，旅行費用とつぎの保障内容の海外旅行傷害保険の保険料支払い希望額（willing to pay）を直接回答させた。

・傷害，疫病により死亡した場合，最高3000万円が支払われる。

・傷害，疫病により医師の治療を受けた場合，最高800万円の治療費用が支払われる。

・携帯品（カメラ，宝石，衣類など）が盗難，破損，火災などの偶然の事故にあって，損害を受けた場合，最高40万円まで保証される。

・旅行中あやまって他人にケガをさせたり，他人のものをこわしたりして損害をあたえ，法律上の賠償責任を問われた場合，最高5000万円まで保証される。

(b)海外旅行傷害保険の選好判断：アメリカへ1週間（7日間）の海外旅行に行く場合，旅行代理店から，表5に示す保障と保険料が異なる3タイプの海外旅行傷害保険を勧められたとして，加入希望を順位法で求めた。

結果と考察

(1)リスク回避志向性の個人差の測定

リスク回避志向尺度項目において，［あてはまる］と［ややあてはまる］と回答した人をあわせたYES比率を示したものが，表1の2列である。海外旅行におけるリスク回避志向は，全般に高い。たとえば，「事故犯罪多発地域の回避」(76%)や，「安全性の高い航空会社の選択」(67%)などがある。

5点尺度の項目評定値に基づいて，因子分析(主因子解，バリマックス回転)をおこない，3因子を抽出した(累積寄与率44%)。表1の3－5列は，各因子の因子負荷量を示す。結果は，項目が多少異なる一般的なリスク回避志向質問紙（楠見，1994）とほぼ対応した。

第Ⅰ因子の負荷量が高い項目は「事故犯罪多発地域の回避」，「安全性の高い航空会社の選択」などであり，［生命リスク回避］因子と命名した。

第Ⅱ因子の負荷量が高い項目は「観光バスに乗ったとき，大事故のことを考えてしまう」，「飛行機に乗ったとき，大事故のことを考えてしまう」などであり，［不安］因子と命名した。

第Ⅲ因子の負荷量が高い項目は「ギャンブルが好きだ」，「低金利でも確実な定期預金の方が株式投資よりも好ましい」などであり，［金銭リスク回避］因子と命名した。

各因子に該当する項目ごとに，因子得点の平均値を求め，下位尺度得点とした。そして，下位尺度得点×海外旅行経験（5水準）の分散分析をおこなった。その結果，第Ⅰ因子［生命リスク回避］の下位尺度得点，第Ⅱ因子［不安］の下位尺度得点とも有意であった。しかし，第Ⅲ因子［金銭リスク］の下位尺度得点は有意ではなかった。とくに，海外旅行未経験で渡航希望がない者は，他の群に比べて，［生命リスク回避］と［不安］下位尺度得点が高かった。また，海外旅行経験が2回以上の者は，他の群に比べて，海外旅行における［生命リスク回避］や［不安］下位尺度得点が低

表1　海外旅行版リスク回避志向尺度の因子分析結果（N＝112）

項　目	YES比率	因子負荷量 Ⅰ	Ⅱ	Ⅲ	共通性
海外旅行に行くときは事故・犯罪が少ない地域に行きたい	76%	**.76**	.12	.00	.59
海外への飛行機は値段が高くても安全性の高い航空会社がよい	67%	**.74**	.03	.06	.55
海外旅行に行くときは安全のため数人で行きたい	61%	**.71**	.03	.19	.55
最近墜落事故を起こした航空会社は利用したくない	59%	**.65**	.05	.31	.52
危険があっても日本人の行かないところにいきたい(反転項目)	22%	**-.53**	.10	-.01	.29
海外の自動車運転は危険だ	38%	**.42**	.25	-.06	.24
観光バスに乗ったとき，大事故のことを考えてしまう	13%	.02	**.79**	-.19	.66
飛行機に乗ったとき，大事故のことを考えてしまう	52%	.05	**.72**	.29	.60
海外は危険なので，なるべく行きたくない	8%	.34	**.49**	-.14	.37
電車やバスの事故時に死亡率の高い座席を気にする	6%	-.12	**.45**	-.11	.23
ギャンブルが好きだ(反転項目)	15%	-.07	-.01	**-.75**	.56
低金利でも確実な定期預金の方が株式投資より好ましい	65%	.26	-.21	**.65**	.53
宝くじは当たる確率が低いので買わない	49%	.01	-.13	**.59**	.36
1万円以上のお金は貸さない	29%	-.01	.22	**.50**	.30
今ほしいものを買う方が貯蓄よりもよい(反転項目)	40%	-.22	-.38	**-.15**	.22
固有値		3.15	1.98	1.42	
因子寄与率		21.0	13.2	9.5	

註　YES比率は，5件法で「あてはまる」および「ややあてはまる」と回答した人の比率を示す
　　太数字は因子負荷量.40以上を示す

い傾向があった。

(2)リスクイメージの形成要因

海外旅行(滞在)経験者は被調査者の半数(51%)であり，そのうちの病気，盗難などの直接経験者は被害に遭った人（14%）と遭いそうになった人（4%）を含めて，2割程度である。その内容は病気が多い。一方，身近な人の海外旅行経験を聞いた人は98%であり，5人以上から聞いたという人が64%とあった。そのうち友人，家族，親戚が被害に遭った人は19%，知人が被害に遭った人は16%であった。被害に遭った知人はいないと答えた人は65%であった。このように，海外旅行は，大学生にとって，かなり身近なものである。しかし，被害の直接経験（18%），間接経験（35%）とも半数以下であり，リスク認知形成の主要な源ではないと考える。

(a)地域別の治安熟知度，リスク認知，訪問忌避，事件の記憶：5地域（サンフランシスコ，中国，イタリア，オーストラリア，メキシコ）の治安熟知度，リスク認知，訪問希望に関して4段階評定を求めた。表2の数値は平均評定値（たとえば，[1. 治安を全く知らない] − [4. 治安をよく知っている]）を示す。矢印の数値は，評定値間の相関係数を示す。

治安の熟知度は全般に低い。また，治安熟知度とリスク認知の相関も低い。リスク認知は，オーストラリア以外の4地域は高い。地域に対する「危険」というリスク評価と「行きたくない」という訪問忌避の評定値間相関が高い地域は，メキシコ，中国である。また，「安全」という低リスク評価と「訪問したい」という訪問希望の評定値間相関が高い地域はオーストラリアであった。リスク認知が高いにもかかわらず，訪問希望が高い地域は，サンフランシスコとイタリアのような観光名所である。このように，リスク認知と訪問忌避（希望）が相関しない地域もある。

また，日本人の海外被害事件についての再認率は事件によって大きな差がある（カッコ内の比率は「3. だいたい覚えている」または「4. よく覚えている」と回答した人の比率である)。「ローマ女子大生暴行事件（97%)」，「留学生サンフランシスコ射殺事件（76%)」，「老人兄妹中国ホテル殺害事件（53%)」，「女子大生メキシコバス旅行射殺事件（47%)」であった。また，架空事件「夫婦オーストラリア行方不明事件」に対しても19%の誤再認があった。こうした事件の再認率は，記憶検索における利用可能性（availability）の影響を受けるため，事件の報道頻度，自分の関心，類似事件の有無に左右されると考えられる。

さらに，5地域における事件再認の有無と地域のリスク認知(危険−安全)の2×2の分割表で，連関を見たが，χ^2検定の結果，いずれも有意でなかった。このことから，地域に対するリスク認知の形成要因は，最近の顕著な一事件の記憶だけではなく，複数の要因が影響すると考えられる。

(b)海外旅行のリスクの推定：表3は，(1992年度）1年間の日本人海外旅行者の死亡者数，被害金額5万円以上の盗難事故件数，医師治療を必

表2　地域リスク認知が訪問忌避に及ぼす効果：数値は平均評定値（SD）

	メキシコ	イタリア	中国	ｻﾝﾌﾗﾝｼｽｺ	ｵｰｽﾄﾗﾘｱ
治安熟知度 (1.よく知っている-4.全く知らない)	2.9(.67)	2.2(.73)	2.2(.64)	2.4(.71)	2.3(.75)
	↓.01	↓-.01	↓-.17	↓-.07	↓-.31**
リスク認知 (1.とても安全 - 4.とても危険)	3.0(.62)	2.9(.69)	2.8(.59)	2.4(.70)	1.9(.62)
	↓.29**	↓.18	↓.26**	↓.17	↓.27**
訪問忌避 (1.とても行きたい-4.絶対に行きたくない)	2.4(.78)	1.8(.74)	2.2(.80)	1.9(.66)	1.7(.69)

註　矢印は相関係数 **:$p<.01$(N=112)

表3　海外経験別の海外リスク推定値（中央値）

海外経験	N	死亡者数	盗難事故件数	病人数
滞在経験あり	17	50	10.000	6.000
渡航2回以上	22	30	3.500	1.000
渡航1回のみ	18	100	1.350	7.500
未経験(渡航希望あり)	50	76	10.000	8.000
未経験(渡航希望なし)	5	320	11.000	7.000

要とする病人数の推定値（中央値）を，海外経験別に求めたものである。これらの推定値は，実際の統計による被害者数に比べると過小評価の傾向がある。すなわち，海外における事故などによる年間死亡者数は334人，強盗，窃盗などの被害件数は5,368件である（外務省，1994）。なお，海外旅行中の病人数はこの統計にはない。参考までに海外旅行保険の担保項目別統計表（支払）によれば，疾病による治療費用支払人数は191,244人である（損害保険料率算定会，1994）。なお，窃盗などの被害件数や病人数は，統計に現れない暗数がかなり多いと考えられる。

表3に示すように，2回以上の海外旅行経験者による被害者数の推定値は，滞在経験者や海外未経験者に比べて小さい。一方，海外未経験で渡航希望がない者の被害者数の推定値は，他の群に比べて高い。死亡者数の推定値は，実際の人数に近い。しかし，病人数の推定においては，いずれの群も，実際の病人数に比べてかなり過小評価していることが明らかになった。

(c)原因別死亡者数の順位法による判断：表4は，昨年1年間における原因別死亡者数の多少判断を順位法で求めた平均順位である。海外旅行事故は自然災害と同程度の過小評価をされている。海外旅行事故死亡者数を自然災害死亡者数よりも（現実とは逆に）過小評価した人は61％であった。また，ガンは交通事故の4倍の死亡者がいるにも関わらず，交通事故よりも過小評価されている。こうしたバイアスは，報道頻度，死亡事態の直接または間接接触などの影響によって過大評価されると考えられる（e.g., Lichtenstein, Slovic, Fishhoff, Layman, & Combs 1978）。

(4)保険加入経験（意思）及び保険加入理由

(a)保険加入経験（意思）：海外経験者の内，「必ず保険に加入していた（75％）」が多く，「加入した時もしない時もあった（12％）」，「加入しなかった（12％）」は少数派である。また，海外未経験者は「必ず加入したい（65％）」と「行く場所によって決める（35％）」に分かれ，「加入するつもりはない（0％）」はいなかった（表5参照）。

(b)保険加入理由と未加入理由：加入（希望）者（時々加入を含む）と未加入者（時々加入を含む）それぞれにおいて，その理由に関する項目について［あてはまる］から［あてはまらない］までの4件法の回答比率を図1，図2に示した。

保険加入の大きな理由は，「海外はリスク（危険）が高い」という認知があるため，「事故，けが，犯罪などに遭った場合の金銭的負担を回避」したり「精神的安心」を得るためである。そこで，個人のリスク回避志向（表1）が保険加入理由に及ぼす影響を見るために，下位尺度得点との相関を調べた。［生命リスク回避］得点との相関が有意な項目は，「周囲の加入（.44）」，「精神的安心（.30）」，「海外リスクが高い（.27）」であった。すなわち，リスク回避志向の強い人は，「海外リスクが高い」と認知して，「安心する」を求めて保険加入し，「周囲が加入」しているほど保険に加入する。なお，他の下位尺度得点と加入理由項

表4　原因別死亡数の順位法による判断

実際の順位	1.ガン	2.交通事故	3.火災	4.海外旅行事故	5.自然災害	6.薬の副作用
平均順位	2.1	1.7	3.8	4.5	4.1	4.9

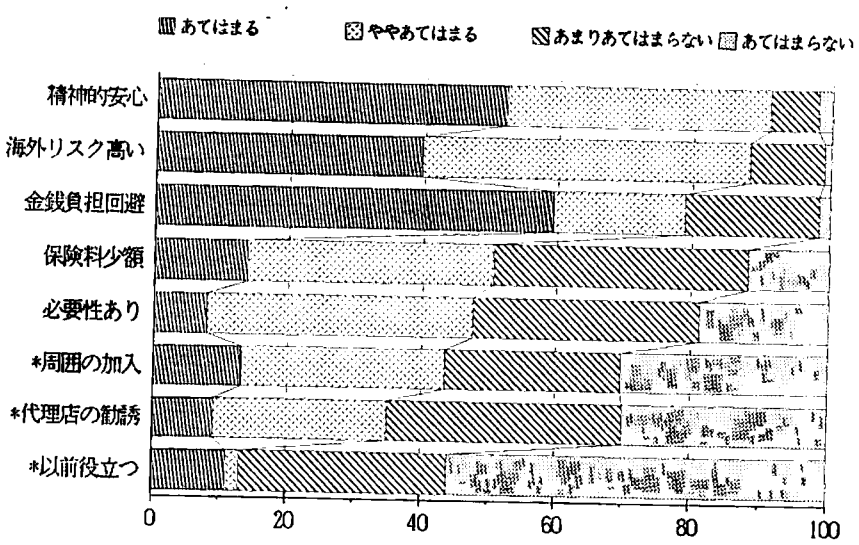

図1　旅行保険加入理由（%）N＝105，＊N＝50（海外経験者のみ）

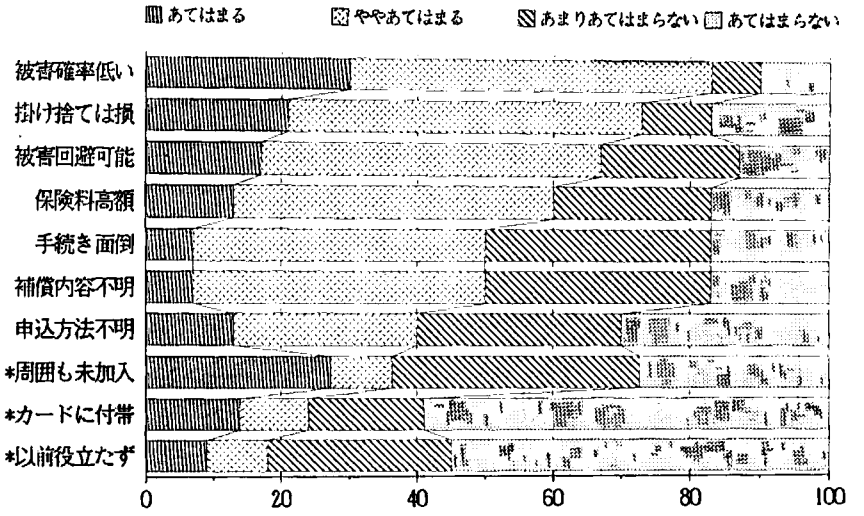

図2　旅行保険未加入理由（%）N＝33，＊N＝14（海外経験者のみ）

目の評定値間の相関はいずれも有意でなかった。

一方，保険未加入者は，「被害に遭う確率は低い」というように海外リスク認知が低く，さらに「自分が注意していれば被害は避けることができる」というように，リスク回避可能性，制御可能性を高く見積っている。したがって，「掛け捨てなのでもったいない」，「保険料が高額である」と保険料負担を高く見積もる傾向がある。

(5) 保険料の支払い希望額および加入希望タイプ

(a) 海外旅行傷害保険料の支払希望額（WTP）：1週間アメリカ旅行における傷害保険の支払い希望額を，海外未経験者のうち，加入意志の強い「必ず加入したい」者（36人）と加入意志の弱い「行く場所によって決める」者（19人）を比較した。加入意志の強い者は希望額（中央値）が15,000円（25%値：10,000円，75%値：30,000円）であり，加入意思の弱い者の希望額の中央値10,000円（25%値：8,750円，75%値：15,000円）に比べて高かった。

(b) 海外旅行傷害保険の選好判断：表5は，3種の海外旅行傷害保険における加入希望順位が一位の人数を示す。［中保障－中保険料］タイプの選好が強い。また加入意志が強い者ほど，［高保障－高保険料］タイプの選好が強い。その傾向は，

表5　加入意志の強さが海外旅行傷害保険タイプの選好判断に及ぼす影響

タイプ	低保障-低保険料	中保障-中保険料	高保障-高保険料	
死亡保障	2,000万円	5,000万円	1億円	
治療費用	700万円	800万円	1,000万円	
盗難・破損	40万円	60万円	100万円	
支払い保険料	8,000円	12,000円	17,000円	合計（人）
海外経験者				
必ず加入した	16	21	3	43
時々加入した	2	1	3	6
加入しなかった	5	2	0	7
海外未経験者				
必ず加入したい	2	19	15	36
場所によって決める	7	7	5	19
加入するつもりはない	0	0	0	0
合計（人）	32	50	26	111

海外未経験者に高い。一方，海外旅行経験者は，［低保障－低保険料］タイプへの選好が強くなる。これは，表3に示すように，海外旅行経験が海外リスク認知を過小評価させ，保険料の支払い希望額を低下させると考えられる。

総合考察

海外旅行傷害保険に関する，大学生112名に対する質問紙調査の結果は以下の通りである。

(1)海外旅行の2回以上の経験が，海外リスク認知を低下させ，その結果，保険加入意思を弱め，保険料の支払い希望額を下げる。

海外に旅行することの好きな人は，日常生活から脱出することによって，不確実性や新奇性を求めている。したがって，リスクを過小評価し，傷害保険加入意思も弱かった。また，海外における無事故の経験を重ねることによって，「保険が役に立たなかった」として，保険の効用を低減することになったと考える。

(2)海外旅行未経験者と旅行経験1回の者は，海外リスク認知が高く，保険加入意志が強く，支払希望額も高い。

とくに，リスク回避志向の高い人は，リスク認知が高く，海外旅行に出かけること自体を避ける傾向があった。こうした人は，生命リスクや身体的リスクに対する不安が高い。保険加入によって，金銭リスクは軽減できるとしても，生命リスク認知や不安を低減しないかぎり，海外旅行には出かけないと考える。

(3)保険加入意志を規定する要因は，リスク認知要因（海外リスクは高い）と心理的要因（精神的に安心するなど），および経済的要因（金銭的損害を避けたい）がある。ただし，「保険料が少額である」と思っている人は半数にすぎない。したがって，保険のタイプとしては，［中保障－中保険料］タイプが最も好まれ，［低保障－低保険料］タイプがつづく。

(4)保険未加入を規定する要因には，海外リスクの低い認知や掛け捨て嫌いがある。こうした掛け捨て嫌いは，日本においては，生命保険を含む保険全般にわたって見られる（たとえば，高尾，1991，田村　1992）。ここには，リスク（低確率ではあるが多額の経済負担）を少額の保険料で経費化することを嫌い，貯蓄でリスクに備えるような非合理的経済行動が存在する。

以上の結果は，大学生を調査対象者としたため，社会人（世帯主）に比べ，保険加入希望や保険料支払い希望額が少な目に出ている可能性がある。その理由として，(a)知識や経験不足によって海外リスクを過小視したり，若いがゆえにリスクの

制御可能性を過大視すること，(b)死亡，事故後遺症による扶養家族の生活への影響を考慮する必要がなく（逆に親の金銭的支援を期待でき），保険料支払いのための所得が少ないためである。(b)については，今後，調査対象者を社会人に拡張することが考えられる。また，(a)については，以下の２つの展開が考えられる。

第一は，リスク情報や保険商品情報の提供が，加入意思に及ぼす効果の検討である。旅行傷害保険の未加入の理由には，図２に示すように「海外リスクの過小視」と，「掛け捨て嫌い」や「補償内容がわからない」といったリスク自体と傷害保険に関する知識不足があった。すなわち，保険は無形の将来財であり，購買時に効用が得られるサービスではない。したがって，リスクの存在とその補償，さらに，保険に付帯する複数のサービスやサポートの存在を，消費者（旅行者）に知らせる必要がある。そうした情報が，「掛け捨て保険は損」という保険観を変えて，加入意思を促進するのかを検討することは，重要な課題と考える。

たとえば，1993年度のある保険会社の海外旅行傷害保険の補償項目別の保険金支払件数でみた比率は，疾病治療64％，傷害治療12％，賠償責任２％，傷害死亡・後遺症0.2％，疾病死亡0.04％である（島田 1995）。こうしたリスク情報を旅行者に提供することは，疾病・傷害治療費用の補償が手厚い保険への加入（経済合理的行動）を促進することになると考える。すなわち，今後の海外旅行傷害保険は，リスクコミュニケーションによって，リスク認知のバイアスを修正し，海外旅行における安全で能動的な活動を支援することが必要である。

第二は，旅行傷害保険だけではなく，他の傷害保険との比較検討である。傷害保険は，新保険，雑種保険といわれるように，私たちの活動の拡大にともなって，多種の保険（スポーツやレジャー保険など）が開発されている。こうした能動的な活動にともなうリスクに対する傷害保険は，個別活動に対するリスク認知が加入意思に大きく影響すると考えられる。ここで，スポーツなどの能動的なリスク志向活動は，受動的リスクに比べて受容される傾向がある（Starr & Whipple 1980）。こうした傾向とリスク認知，保険加入行動との関係を比較検討することは，今後の課題である。

付　記

本論文は，楠見（当時筑波大学）の指導で，小林が筑波大学社会工学類卒業研究として収集したデータを，楠見が再分析し，まとめたものである。

参考文献

姉崎義史　1985　損害保険商品の抽象的性質（第３次品質）について　保険学雑誌，509，1-19.

Bromiley, P., & Curley, S. P. 1992 Individual differences in risk taking. In J.F. Yates (Ed.) Risk-*taking behavior*. NY: Wiley.

Combs, B., & Slovic, P. 1979 Newspaper coverage of causes of death. *Journalism Quarterly*, **56**, 837-843.

外務省　1994　平成5年度外務省海外邦人援護統計

楠見　孝　1994　不確実事象の認知と決定における個人差．心理学評論，**37**，337-366.

Lichtenstein, S., Slovic, P., Fishhoff, B., Layman, M., & Combs, B. 1978 Judged frequency of lethal event. *Journal of Experimental Psychology: Human Learning and Memory*, **4**, 551-578.

日本損害保険協会　1993　損害保険に関する全国調査総合報告書（財）日本損害保険協会

西村周三　1989　生命保険分析におけるリスク　日本リスク研究学会誌，**1**（1），28-33.

岡本浩一　1992　リスク心理学入門　サイエンス社

損害保険料率算定会　1994　平成5年度傷害保険統計　損害保険料率算定会

島田晴雄　1995　国外のリスク　島田晴雄・太田弘子（編）安全と安心の経済学　岩波書店

Starr, C., & Whipple, C. 1980 Risks of risk decision. *Science*, **208**, 1114-1119.

高尾厚　1991　保険構造論　千倉書房

田村祐一郎　1992　「掛け捨て嫌い」の保険思想　日本リスク研究学会誌，**4**（1），88-95.

Trimpop, R.M. 1994 *The psychology of risk taking behavior. Advances in Psychology*: Vol. 107, Amsterdam: North-Holland.

上田和勇　1987　保険加入時の消費者の知覚リスクに関する実証研究　文研論集（(財)生命保険文化研究所），79，1-36.